

は じ め に

『多民族社会における宗教と文化』第27号をお届けする。

2023年度は、コロナ禍収束の「始まりの始まり」の1年だったように思う。いつをもって「収束」したのかは、ずっと先になって初めてわかるのだろう。今言えることはただ、現在の私たちが、感染症蔓延を少しずつ過去形で語り始めていること、そして、2019年秋に端を発し2020年初頭から世界中に広がったこの災いのあおりを受けた社会変動の渦中を生きていることである。

本号は、人間文化学科の八木祐子氏のイニシアチブのもと足かけ3年にわたった研究シリーズ「コロナ禍の社会—世界の事例から」の区切りの号にあたる。筆者もまた2021年度、この研究発表シリーズでの報告の機会を2度にわたり頂戴した。本号では、タイとベトナムにおけるコロナ禍についての報告（木曾恵子氏、伊藤まり子氏）を掲載することができた。タイとベトナムはいずれも初動時に「封じ込め」政策を取り成果を出している。しかしそうした優等生的な感染症予防対策の陰には、社会とのかかわりを遮断された弱者の存在があったことや、この分断とは別の枠組みでの新たな互助の仕組みが民間主導で模索されたことを、両報告から知ることができる。

また、「妻方の親や姉妹を中心とする親族のつながり」が緩やかに構築されつつあった少子高齢化が進む東北タイ農村地方で、ステイホームの強い推奨でそのつながりが途切れかけたとの報告を、一般教育部の天童陸子氏による、「災害女性学」の視点からの気仙沼地域の女性たちのICT就労に関する調査報告と並べて読むことができた。私たちはこの三年余、肌感覚でのつながりが脅かされる一方で、デジタルの力を新しい形での共同体創成につなげる模索も行ってきた。いずれも女性にフォーカスされた報告であることは示唆的である。

AIが搭載されたアンドロイドの演劇に関する拙稿を、本論集にうまく位置づけられるかどうか、執筆中は心許なかった。しかし、グループ代表の立場で本号のすべての記事に目を通してみて、「コロナ禍収束の始まりの始まり」の風景の端に、拙稿もまた、それほど奇抜でなく読者の中に像を結ぶのではないかと期待感を、ささやかに持っている。

人間文化学科の八木祐子氏による「ボージプリー文化圏の婚姻儀礼と民俗歌謡」シリーズを本号でも継続して読むことで私たちは、「社会変動の渦中を生き」つつしかし断絶だけに目を向けることの狭窄を戒められる。多民族グループの幹の声として読みいただければ幸いである。

最後に、今年度開催された本グループ主催の研究会実施記録を以下にまとめおく。

〈共同研究「多民族社会における宗教と文化」主催研究会〉

◆第1回公開研究会

2023年6月10日（土）13:00開場 13:30～15:30（＝本学講義館2階C202）

司会・企画 天童 陸子（本学一般教育部教授）

報告 SDGs と子どもの未来：女性・若者のアクションが世界を変えていく—エコアナウンサーからのメッセージ

櫻田 彩子氏（サステナビリティ日本フォーラム 運営委員／事務局次長、Think the Earth 理事）

◆第2回公開研究会

2023年10月24日（火）16：20～17：50（＝本学第2講義館2階 K205）

司会・企画 永田 貴聖（本学現代ビジネス学科教授）

報告 「家族の歴史を語る」を語る

金村 詩恩氏（著述家）

◆第3回公開研究会

2023年11月18日（土）13：30～17：00（＝本学人文館五階 A549）

司会・企画 八木 祐子（本学人間文化学科教授）

報告Ⅰ 国家統制のなかでのケアのつながり：コロナ禍のベトナム

伊藤まり子氏（京都外国語大学国際言語平和研究所・客員研究員）

報告Ⅱ つながりの分断と共助への試み—コロナ禍のタイ

木曾 恵子氏（日本学術振興会特別研究員（RPD）／宮城学院女子大学）

◆第4回公開研究会

2023年11月24日（金）16：20～17：30（＝本学講義館2階 C203）

司会・企画 松本 周（本学一般教育部准教授）

報告 グリーフケア研究会 愛する人の死と新島八重—キリストの心を心とせよ—

山下 智子氏（同志社女子大学教授）

〈共同研究「多民族社会における宗教と文化」共催研究会〉

◆2023年度 第3回キリスト教講座 主催：宮城学院キリスト教センター

2023年6月16日（金）16：30～17：30（＝本学礼拝堂2階 ヴェリタス）

共催：宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所多民族グループ

報告 三浦綾子における死と生

松本 周氏（本学一般教育部准教授）

予算削減のあおりを受け開催研究会数が昨年の7回から5回に絞られたのは遺憾であるが、関係者の互助の精神と総意工夫により今年度も活発な研究活動を行うことができた。すべては、学内外の研究者のご協力の賜物である。深謝申し上げる。

ウクライナへのロシア軍の侵攻から2年と2日、ガザ地区のラファで約150万人が逃げ場を失い危機にある今日、4年にわたり実施されなかった本学人間文化学科の海外実習（ヨーロッパ）の引率の往路機内にて以上記す。

2023年度共同研究代表 間瀬幸江